

202405 口語詩句 5月 龍 秀美

<総評>

短歌や俳句や川柳はその定型性のゆえに「音楽」をつくるが、定型から自由になっている分、口語詩句が持っている「物語」を作る能力が、今月の作品に際立って感じられた。

何度でもだるまが転ぶ花曇

音無 早矢 埼玉県

——なつかしい子どもの遊び「だるまさんがころんだ」。繰り返される遠い風景が花曇りの向こうに浮かび上がる。

暑いねといって包丁振り下ろす

音無 早矢 埼玉県

——近年の「殺人的」な暑さが、包丁を振り下ろすという動作に連想される。

金魚は名前を付けると溶ける

長谷川柊香 宮城県

——水槽という限られた空間で、しかも名前まで付ける人間の身勝手さ。金魚が「構わないで！」といているようだ。

顔も知らぬ

父の生家に向かうとき

わたしウォーターリリーのつるぎ

さいう 石川県

——震える心が「ウォーターリリー」の花弁に宿る。美しい詩。

ずんむりと
濡れたからだを引き上げて
くるぶしに棲むにんぎょのなごり

さいう 石川県
——「ずんむり」という不思議な擬態語と「くるぶし」という人体で最も繊細な部分が呼応して作る物語が新鮮だ。

ほどほどに地軸傾く木の芽時

奎いう子 佐賀県
——木の芽時という不安定な季節は地軸の傾きもほどほどだ。

青空にありおりはべりいまそかり
これまで生きているということ

マズルカ 山口県
——「在る」を表す文語の変化が青空に響き合う。

もうみんな
プテラノドンを知っている
プテラノドンは
もうずっといない

Flim 神奈川県
——言葉によって存在するものと、言葉では存在が保証されないものがある。

三人称単数として夜の街をゆけば
鎧のように住宅

辻村陽翔 北海道
——誰でもないものとして夜の街を行けば、黒々とした誰かの家々に固く拒否される。

コンタクトレンズを
ひとさし指に載せ
さわさわ窓に揺れる新緑

Azusa 京都府

——繊細な一瞬の動作に、細やかな自然が呼応する。

自分らしさが
なくなるからこそ
生きられるそうとも言える
と母の目のしわ

かわなご まい 埼玉県

——自己主張を善しとする近代の精神と、他己を区別しない安らかさというものがあると。

左目の視力が落ちて灯台で
水も飲まずに囁るバケツ

常田 瑛子 山口県

——上の句と下の句を「灯台」の存在がしっかりとつなぎ留める。

ニッポンと
呼ばれて振り返るのはだれ？
政府、天皇、それともわたし

ひろみ 京都府

——国というアイデンティティを率直に問いかける。

続柄に何も書けない遠花火

小里京子 北海道

——続柄を求められるというこの世のルールに当てはまらない関係とは？遠花火に問いか

ける。

母の日のエプロン箱に入れられて

檜野 美果子 宮城県

——エプロンという働き着が「母の日」という装置で特別なものになる。「母」というのは働き着だろうか。

居眠りの国語を離れ夕立は

鼻毛引き抜く漱石に降り

秋山颯汰朗 群馬県

——半ば聖人化された文豪漱石のカリカチュア。

水かきがあったであろう場所に

子が挟んだままのしらす一匹

睦月 雪花 愛知県

——魚から進化した人類は胎児に水かきのある時期もあるという。幼い児の指に挟まった「しらす一匹」から広がる空想の豊かさ。

線として描くべき雨十二月

福山ろか 埼玉県

——広重の突き刺さる線のような雨の描写は西洋画からいうと不可思議だろう。しかし十二月の雨はそのように過酷だ。

私は優しい

周りはおかしな人ばかりだが

私は優しい

いずみ 神奈川県

——「優しい」の対義語は「おかしい」ではないだろうが、自分が優れていると思うのは「人情の自然」だろう。この二つの語のズレが自己擁護のズレを表しているようだ。